

第5章 現在の和歌山と将来



紀州と近代文学



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

佐藤春夫から中上健次へ

紀州の文学を考えると、文化的な面からも人情的な面からも、紀北と紀南という分類ができるようです。紀南では、新宮から佐藤春夫(1892～1964)と中上健次(1946～1992)という、二人の優れた文学者が出ています。

佐藤春夫は、1917(大正6)年に『西班牙犬の家』『病める薔薇』を発表し、新進作家の地位をうちたてました。『病める薔薇』を書き改めた『田園の憂鬱』は、大正時代を代表する作品になりました。細やかな感情を文語詩でうたいあげた『殉情詩集』や評論『退屈読本』などの作品でも高く評価されました。また、『車塵集』などの漢詩の翻訳、『晶子曼陀羅』などの伝記物でも多くの作品を残しています。晩年は、『わんぱく時代』や『望郷の賦』など、故郷を題材にした作品も目立つようになりました。



佐藤春夫



中上健次

中上健次は、1975(昭和50)年29歳のとき、『岬』という作品で第74回芥川賞を受賞しました。その後、『枯木灘』『地の果て 至上の時』など、熊野の風土と「物語」にこだわりつづけた作品を次々と発表して、たちまち新しい文学の担い手と認められました。また紀伊半島をめぐる作品『紀州 木の国・根の国物語』に代表されるように、多くの優れたエッセイも残しています。晩年、地元新宮で自主的な講座である「熊野大学」をおこし、熊野の復興に力を尽くすとともに、広く世界にアピールできる文学を目指しました。

さらに、新宮との関わりで言えば、日高郡日高川町出身の沖野岩三郎(1876～1956)は、新宮での「大逆事件」の体験を『宿命』という作品などに描いて注目され、児童文学にも活躍しました。東くめ(1877～1969)は「鳩ぽっぽ」など、今でも歌い継がれている多くの童謡を作詞し、西村伊作(1884～1963)は東京に文化学院を開校し、西欧的な生活や住宅、新しい教育の問題などに独特な考えを大正時代に著述しました。両人も、新宮出身です。

紀北出身の人々

第二次世界大戦後の文学を「戦後文学」といいます。それを代表する大岡昇平(1909～1988)は、東京生まれですが、両親は和歌山市出身でした。『野火』や『レイテ戦記』などの代表作とともに、『帰郷』

* 1 文章の内容を他の国の文章になおすこと。

という作品もあります。

和歌山市出身の^{ありよしさわ こ}有吉佐和子（1931～1984）は、^{ぶんだん}文壇登場作「^{じうた}地唄」にみられるように伝統的な芸能への関心が強く、自らの家系を通して世代間の考え方の対立を描いた『紀ノ川』は代表作です。和歌山県の川を題名にした『有田川』『日高川』などもあります。また、『^{はなおかせいしゅう つま}華岡青洲の妻』のモデルも、^{こうこつ}紀州ゆかりの女性です。『^{ふくごう おせん}恍惚の人』『^{ふくごう}複合汚染』など、現代社会のかかえる問題をとらえ、当時の流行語となるほど大きな反響をよびました。

すさみ町生まれ和歌山市育ちの^{じょうなつ こ}城夏子（1902～1995）は、少女小説集『^{ばら こみち}薔薇の小径』で注目され、感情を素直にのべた小説『^{すなお まり}毬をつく女』などの代表作があります。

海南市出身の^{たぎしげ}田木繁（1907～1995）は、プロレタリア詩人として人々の生きる姿を描いた『^{たぎしげ}機械詩集』などを発表しました。



有吉佐和子

地元での活動

紀州方言を用いた『馬』という作品などで劇作家として知られた^{さかなかまさ お}阪中正夫（1907～1998）は紀の川市の出身です。阪中のまわりに集まった人々は、^{そうかん}機関誌『^{そうかん}紀伊詩人』を創刊して、大正期から昭和初期にかけて全国的に農民たちの詩の運動を大きく盛り上げました。

1931年^{いぼつし}猪場毅によって和歌山市で創刊された『^{たにざまじゆんいちろう}南紀芸術』には、^{いぶせます じ}谷崎潤一郎・^{いぶせます じ}佐藤春夫・^{いぶせます じ}井伏鱒二ら当時を代表する文学者にまじって、^{きんほく}紀北と^{きんなん}紀南の作家たちも多く^{きこう}寄稿しています。^{みなみゆき お}南幸夫（1896～1964）もその一人ですが、南は東京で『^{ぶんげいしゆんじゅう}文芸春秋』の創刊にかかわっています。やがて故郷に帰って、^{き たむらすむ}喜多村進（1889～1958）などと地方文化の向上に^{こうけん}貢献しました。



わかやまの知識



【紀州の方言】

紀州で、人も無生物と同じように「ある」と表現するのを知って驚く人もいます。しかし、^{みやび}雅の文学といわれる『^{いせ}伊勢物語』にも「昔、男ありけり」ではじまっていますから、^{へいあん}平安時代の用法が残っているといっ

てよいかもしれません。
和歌山県のあちこちに古語が残されていますが、この「ある」の用法もその名残の一つといえます。特に古い語法の残ったものとして「落ちる」を「^お落つる」、「逃げる」を「^{へい}逃ぐる」というような使用があり、日高郡や西牟婁郡の山間地では、今も使われています。また日高地方に残されている「日高の馬はこくるほど^か駆くる」というしゃれた表現があります。馬がころぼほどによく駆けるということです。

何ととっても紀州方言の特色をあらわしているのは、「ノシ」、「ヨシ」の文末のことばの使い方でしょう。ものごとを早くさせようと相手を促す時の「はよせーソー」にしても、新宮方言の「そうですか」の意の「^{そー}そーカン」にしても注目すべき文末のことばの例ですが、^{けいご}敬語表現としての「ノシ」には、言うに言われぬ良さがあり、「ええ天気やノシ」、「そうよノシ」と挨拶したり、^{あいきつ}相槌を打つのは多く女性ですが、紀州人のもつ温かみと品の良さが伝わってきます。また、「・・・しヨシ」、「そうヨシ」など、「ヨシ」には敬意はあまり含まれていないといわれますが、「シ」の音に含まれる母音「イ」のすずしさが独特の味わいを与えてくれます。